Sapporo Phoenix の発足について

～札幌からトップリーグ参入を目指すアイスホッケーチームを～

オリンピック２０２０TOKYO 大会が新型コロナウィルスの感染拡大により２０２１年へ延期を余儀なくされた昨今、その水面下で札幌では冬季オリンピック２０３０大会を誘致する活動が行われているのは札幌市民ならご存じかと思います。冬季オリンピックの花形である最終日の最終種目は男子アイスホッケーの決勝である。１９７２年には札幌で第１１回冬季オリンピックが開催されているにもかかわらず、近年では花形種目のアイスホッケーをまじかで見たことのない札幌市民や子どもたちがほとんどである。そして何より残念なことなのは、開催誘致を目標としている札幌に日本アイスホッケーのトップリーグに参加するチームすらない。この現状を変えるべくして我々は Sapporo Phoenix を立ち上げることにしました。

１９６６年～５チームにより日本アイスホッケーリーグがスタートし、後に６チームとなり２００４年まで存続した。リーグ発足時より札幌からは岩倉組が参戦し１９７９年に廃部となるが雪印乳業がチームを引き継ぐ形となり、札幌アイスホッケー界を牽引し日本アイスホッケー界を支えてきた。しかし、２０００年に雪印乳業大樹工場の集団食中毒事件をきっかけに２００１年雪印アイスホッケー部は廃部となりクラブチームとして存続を目指し札幌ポラリスを結成したものの経営困難により１年で廃部となってしまった。あれから２０年経った今もトップリーグ参入を掲げるチームがいないのが札幌アイスホッケー界の悲しい現実です。かつては企業スポーツとして成り立っていたアイスホッケーも西武鉄道、国土計画、古川電工、日本製紙、雪印、そして今シーズン限りで解散予定の王子製紙、日本を代表する名だたる企業が、これまでの「企業が抱えるチーム」から「地域に還元をし市民に愛されるチーム」を目指す時が来たと我々は考えています。

現在、札幌で行われるトップリーグの試合は苫小牧王子イーグルスのセカンドホームゲームとしての数試合のみで札幌市民には馴染みのない試合といえるでしょう。応援というよりは何となく見てみようという程度で、会場へ足を運ぶことすらしなくなってきているのです。そして、トップリーグチームを失った本当の代償は、これからの時代を担う子どもたちがアイスホッケーの醍醐味である１つのパックを本気で奪い合い、時に激しくぶつかり合い、男の本能をくすぐる白熱したプレイを見ることもなくなり、選手や競技への憧れを失うことなのです。これが２０３０年に冬季オリンピックを誘致する地域の姿とは思

い難い現実です。９年後、本当に選手として活躍する世代は現在の中学生、高校生、大学生の学生が主体になります。その世代の選手達の目標となり、憧れる選手となり、夢や希望を与えられる環境を作ることが私たち札幌アイスホッケー界で育った者たちの恩返しの形です。

我々Sapporo Phoenix とは、発起人であり代表兼監督の大畠靖史が２０００年に札幌近郊の中学生クラブチーム Sapporo Phoenix Jr を２６歳という若さから１４シーズン監督を務め、これまで輩出した札幌出身の選手総勢約２００名から現在札幌近郊を居住地とし社会人として企業に貢献している教え子たちと、もう一度札幌アイスホッケー界を元気にしたいという選手が集い結成されたチームです。今シーズン登録している選手はトップリーグで活躍した選手や関東大学リーグの第一線で活躍した選手で構成されています。しかし、選手たちはアイスホッケーを職業として生計を立てることは皆望んでいません。それぞれの企業への貢献と地域への還元、アイスホッケーをできることに感謝をし、次世代へつなげていくことを目標とし活動していきます。それこそが Sapporo Phoenix の掲げる「地域に還元をし市民に愛されるチーム」なのです。

１９７５年、アイスホッケーの世界選手権が日本で初めてこの札幌の地で開催されています。この現実も札幌市民の殆どが知らないはずである。歴史をたどると間違いなく日本国内でアイスホッケー競技を第一線で普及させてきたのは札幌なのです。２０３０年に札幌の地で冬季オリンピックを開催するとき、日本代表に札幌出身のアイスホッケー選手たちの名が何名連ねているのかは今後の Sapporo Phoenix の活動にかかっているはずです。北海道を代表するまち Sapporo、そしてスポーツを通して地域貢献のできるまち Sapporo を目指し、多くの市民の皆様に愛されるチーム運営を目的とし Sapporo Phoenix は活動してまいります。ひとりでも多くの皆様のご支援、ご声援をお願いいたします。

Sapporo Phoenix
代表兼監督　　大畠　靖史